

## 「草原生態型牧畜発展論壇」での講演報告

去る 2025 年 1 月 8 日、内モンゴル呼和浩特市にて“蒙古商城”<sup>1</sup>、“内亜書店”および“信奇力情報技術有限公司”主催による、国家機関、草原牧民および都市に住む一般市民を対象とした「草原生態型牧畜発展論壇」が開催されました。講演は対面とネットでのライブ中継によるハイブリッド形式で開催されました。講演会では、日本に留学した経験のある蒙古商城の責任者と学者、そして企業のリーダー達が草原の生態環境における牧畜の発展、草原に生息する蒙古羊の副産物が持つ栄養価とその開発利用、そして草原における畜産を扱う全ての産業チェーン認証システムおよび日本における和牛を高品質に発展させた経験を参考にした啓発など、豊富な内容の講演が多く行われました。

禁牧、休牧、そして牧草地のローテーションは、人と自然の調和した共生の法則に従い、草原を休息させる良法と考えられています。内モンゴルでは、草原生態保護補助奨励政策を連続的に実施し、特に深刻な草の減少と砂漠化によって放牧利用に適さない草原を禁牧区に分け、禁牧区以外の草原は草原と家畜への利用のバランスを取る休牧制度を実施しています。そして草の生産量に従い放牧家畜数を科学的に決定することで、草原の生産力を回復させています。中国政府による「第十四次五カ年計画」が 2021 年 3 月に発表されて以来、内モンゴルでは毎年 3 億 8000 万ムー（1 ムーは 0.0667 ヘクタール、25,346,000 ヘクタール）の草原を禁牧によって休養させ、5 億 9000 万ムー（39,353,000 ヘクタール）の草原が草畜のバランスを取りながら合理的に利用されることで、140 万世帯以上の農牧民がその恩恵を受けています。内モンゴルで行われている草原の過牧解決行動は、草原の休息を持続的に推進し、草原の生態系を根本からバランスよく保護するだけでなく、草原の牧畜業のモデルチェンジとグレードアップの歩みをさらに加速させています。そして、この現状からいかに牧畜を発展させるかを考えなければいけない状況にあります。

今回の論壇では、栄養科学研究所の客員研究員であるボインドグルン・金花先生によって、長年研究されてきた羊の尻尾から採取できる油脂、肝臓カルニチンおよび羊脳中のリン脂質型 DHA など、草原での家畜から得られる副産物に栄養価があることが報告されました。また女子栄養大学副学長であり、栄養科学研究所の所長である香川靖雄教授が主導したモンゴロイドに関する研究成果、さらにモンゴロイドに対する栄養指導なども紹介されました。講演には対面場外に 8,000 人以上の方々オンライン参加され、オンライン参加者からも多くの質問がありました。質問では、モンゴロイドに関する栄養指導、特にモンゴル人における栄養と健康に高い関心が示され、再び講演会を希望する声が多く聞かれました。

<sup>1</sup> 内モンゴル自治区フフホト市セイハン区新華東街にあるモール。通称モンゴリアモール（現ハンカジディモール）。

